

新批評・近代日本文学の構造

7

新構想 近代日本文学史(上)

森安理文・大森盛和編

国書刊行会

新批評・近代日本文学の構造 7 新講想・近代日本文学史(上)

昭和57年12月25日 初版第1刷

平成2年5月18日 初版第2刷

著作権者との
申合せにより
検印省略

編者 森安理文
大森盛和
発行者 割田剛雄

〒170 東京都豊島区巢鴨3-5-18
発行所 株式会社 国書刊行会

電話 (917)8287(代表) 振替・東京5-65209

落丁本・乱丁本はお取替いたします。 印刷・セイユウ写真印刷(株) 製本・青木製本

ISBN4-336-02044-2

VII
新構想・近代日本文学史（上）
目次

第一章 新文学史の構想

新構想のための文学史の問題点について	森安理文	7
読者の変遷と読者史	長谷川 泉	31
近代文学と風土	大久保典夫	51
近代文学と無頼	馬渡憲三郎	61
近代文学と芸能	竹内清己	75
近代文学と戦争	有山大五	95
近代文学の様式の変遷	村松定孝	113
近代文学と比較文学	劍持武彦	133
第二章 近代日本文学史研究の諸問題		
日本近代文学の宿命	高田瑞穂	151
近代文学史における翻訳文学の位相	武田庄三郎	173
近代文学における個と組織	高橋俊夫	193
近代文学における東洋と西洋	高田芳夫	209

近代文学史における女流作家の位置について……………林 恵子 219

第三章 現行近代日本文学史批判

伊東一夫 235

垣田時也 243

笠原伸夫 261

助川徳是 271

武田勝彦 279

橋本芳一郎 287

第四章 近代日本文学研究書誌……………大森盛和 295

あとがき……………大森盛和 337

第一章 新文学史の構想

新構想のための文学史の問題点について

森 安 理 文

一

荒唐無稽という誇りを受けるかも知れない。しかしいま荒唐無稽だと思われる地点まで降りて、考え直してみないかぎり、長い間に固定してしまった近代文学史観に対する批判は成りたないであろう。ひとつの観念が、いろいろの時代のいくつかの時流のなかで、次第に凝固拡大され、いつの間にか既成の公認事項となって絶対視されてゆく過程は、特に文学史にかぎられた事ではない。

これまでも、近代文学史に関する疑義は幾回か提出されている。総合的にあるいはひとつの局限された部面との両面から。文学史批評の声もようやく起り、優れた新しい文学史の構想もいくつか見られるようになった。だが一度敷かれてしまった軌道を修正することは容易なことではない。

俚諺に「十年一日」ということがあるが特に近代のように、めまぐるしく変貌する表面的な現象に眼を奪われる傾向が強くなってくると、むしろ更に「百年一日」というような概念を腹の底に据えておかねばならないような気がする。

日進月歩という概念が、芸術にあつては殆んど無意味であるように、文学の場合もこれに例外ではない。にもかかわらず文学まで日進月歩の眼でとらえようとする日常的な考えは、つい文学史操作の裡にも侵入してくる。これは特に文芸時評と称する月刊ジャーナリズムの副産物的な所為である。この事については、あとで触れなくてはならない。

だが何よりも真先にことあげねばならぬことは、近代文学史がわが国の文学史でないということである。近代文学史が歴史とは称しながら、日本文学史と全く別の孤島にあることである。近代文学史が、日本文学史から隔絶された孤島で、まるで近代紀元一年のように独立して生誕している摩訶不思議を、先ず糺すことからはじめねばならぬ。むろん、それは近代文学史が編年的、具体的に一八六七年、即ち明治元年から記述されていることを指すものではない。また近代文学史にあつて「近代」の成立を幾年頃に想定すべきであるとか、同様に「近代文学」の成立を奈辺に置くかという近代的歴史観および近代的文学観に信を置いての糺弾でもない。

なぜならば、たとえ近代的歴史観、また近代的文学観に準拠する者といえども近代文学史が、日本文学史における陸の孤島であることを否むことはできないであらうからである。

更に陸の孤島であるということは、近世、つまり江戸時代の後期の文学と明治期の初期の文学との間に彼我の間を往来できる道が、若しくは懸橋が造られていないということを指すのではない。

また、明治元年から、いわゆる近代文学のはじまる十年代末頃までの、文学史的な空白期間を近代文学肇国の準備・啓蒙期間としてまだ十分の意義づけが行われていないことを指すものでもない。たとえ彼我の間に通用路が新設され、また孤島の前岸の空地に、なにがしの案内札を立てても、孤島が孤島であることには依然として変らぬからである。

だが、私が孤島と称しているのは、わが国の「近代」そのものが孤島というのではさらさらなく、ただ「近代文学史」に限つてのことであつて、しかもこの孤島は独立の榮に酔い痴れ、みずから孤島の孤島たる意義を宣言し臆面も

なく日本文学史の立入禁止の高札をかかっているのである。「近代」に阿諛し、たえず「近代」に纏綿としてきた近代文学史の「近代」への侍候ぶりについてはなるほどそれなりの効も認めねばならぬが、同時に「歴史」から全く見捨てられていたことに、もう気がつかねばならぬ。

私は語呂で遊んでいるのではない。「歴史」と無縁の場所に「近代」など、あり得よう筈がないからである。

これだけ明らかな自明の理が、何故近代文学史だけを避けて通ったのか、摩訶不思議とはこれを措いてほかにあるまい。

文学の本質といえども、時代によって変るものだと云われたのは、故折口信夫であった。それは時代によって文学に対する概念の変動を認めねばならないからである。

だから近世文学の本質と、近代文学の本質との相違は認めなければならないが、といって両者の間の歴史的孤島を認めることではない。歴史とは絶えず過去と現在とが多旋律的に交流しあい、同じ言語で対話し、浸透しあっているものであるからである。換言すればわが国の近世文学と近代文学との本質的な相違と、日本文学と、たとえばフランス文学との本質的相違とは同一視できないことを明確に認識した上でのことではなくてはならぬ。

また、このことはいわゆる歴史寄りのナショナルリズムではない。

私は近代文学史における理非の糺弾の冒頭に近代文学史の孤島の構造をあげたが、これは近代文学史が文学史となる当初の出發的過誤のみを指すのではなく、過誤は昭和期、更に戦後の今日に至ってもなお執拗に繰り返されているのであって、過誤の上に重なる過誤の累積の恐怖と無惨さをいまさらながら感じるからにはほかならない。

しかもそうした過誤が、謙虚に省りみられるようになれば既に部門的に告発された矛盾や部分的な不明の内のいくつかはおのずから解明されるに至るであろうと思われる。

大学の講義題目では、文学史は明らかに消滅している。私と同世代の文学研究者は、まさに誇らし気に、伝統的な文学史概説や文学史各論の代わりに、問題史ないしは体系論上の問題提起を行なっている……

これは『挑発としての文学史』（一九六六、H・R・ヤウス、響取訳、岩波書店）の冒頭に出てくるヤウスのことばである。ヤウスは、ドイツのコンスタンツ大学の教授であるから当面する大学の講義題目のなかでの文学史の危機感を訴えるところからはじめている。究極的にヤウスの主張するところは、いわゆるテクノクラートの教養理想の擁護者たちへの対案として、文学および芸術の歴史への関心を新たに基礎づけることにあると思われる。だが論理の展開は、イデオロギー批判と解釈学、更にヤウス独自の美学との三者の論争に巻き込まれ、かなり難解なものとなっているが、彼が成立させようとした理論の挑発の目標は、

なにも文学研究の尊重すべき伝統を攻撃するところにあつたのではなく、むしろ、その伝統を意表をついた形で弁明することにあつた。

とし、また、

旧来の精神諸科学すべての分野において、歴史理解の諸パラダイムからの離反が顕著になった頃、構造主義は

世界的な成功をおさめ、構造人類学は最近凱歌をあげることになったが、こうした事態に直面して、新たな文学理論を構築する機会は、歴史の克服にあるのではなく、芸術に特有であり、また芸術理解の特色である歴史性をあますところなく認識するところにある。

と考へ、さて文学研究をその袋小路から救いだすためには、現在、

万能薬とされている完全な種目形態学、閉鎖的な記号体系、形式言語による記述モデルなどではなく、問いと答への解釈学を手がかりに、生産と受容ないし作家と作品と公衆が生み出す力学的な過程を、正當に把握する歴史学であろう。

と主張している。種目別の形態学、閉鎖的記号体系、そして形式言語による記述モデルを拒否することに異存はないが、「問いと答への解釈学」を手がかりにして、「生産と受容が生み出す力学的な過程を正當に把握する」ことだけで新しい文学史が成立するとは思えない。

ヤウスの用語でいえば「第三階級」としての読者、聴衆、観客を故意に隠蔽し、あるいは黙殺してきたこれまでの文学史に「第三階級」の機能を投入させることは、当然なさねばならぬ措置であろうが、問題はかかって「第三階級」の機能の把握の方法にあるのだが、それが「問いと答への解釈学」を手がかりとするだけで、その成果は果して可能なことであろうか。

しかし、それはさて置き、ヤウスのいう現行文学史を混迷に導いたものとして、

実証主義に埋もれてしまった文学史、あるいは自分自身がエクリチュールの形而上学に奉仕するのが精いっぱい

いであった解釈法、あるいは比較対照を自己目的に高めた比較文学

であるとする指摘には、私も全く同感である。

ヤウスによるドイツ文学史に対するアンチテーゼは、西洋文学史の構造に依拠したわが国の近代文学史も当然受けねばならぬ洗礼であらう。

種目形態学、実証主義に埋もれてしまった文学史——これは例えばイズム的な文芸思潮、文学運動、あるいは文学サークル別に羅列した一種の系譜学もこれに類したものであらう。

一例として谷崎潤一郎をあげる。谷崎は悪魔主義とも、耽美派とも、更に晩年は古典派とも呼ばれている作家である。しかし悪魔主義、耽美派、古典派というのは近代文学史における単なる枠組みないしは前提にすぎない。谷崎を展示的に設けられた枠組みに入れて説明することは容易であらう。しかし最も肝心なのは谷崎文学の生まれる歴史の必然性の解明とともに谷崎文学の占める文学史的な位置であらねばならぬ。しかし文学史は枠組みのなかで説明するとどまり、史的には傍流の文学として避けられている。確かに谷崎は文学的時流の変遷とは疎隔であった。文学的時流に冷やかであった。谷崎にしてみれば意識的に時流に対する挑戦があったのかも知れない。この谷崎について、

谷崎の仕事総体を正しく位置づけることの出来ない近代文学史は、どこか狂っている。正統リアリズムという神にひたすら帰依し、社会と文学の進歩という大看板を押し立てつづけてきた文学史の方が、狂ったまま、まっしぐらに直進をつづける馬車馬みたいに滑稽で悲惨ではないのか。いわゆる近代以前の伝統との関係という問題、われわれの文学史が長い間盲点のごとく無視しつづけた難題にも、谷崎は彼としての実践的な解決の道をはつきり示していた。どうやら、この勝負、孤独なアウトサイダー側の、得点のひとり占めといった恰好ではないか。単独者が、ひそやかな地力と力業で、文学史の方を土俵の外に押し出してしまった恰好ではないのか。(昭

というのは佐伯彰一のことである。

谷崎が文学史からはみでることによって、逆に文学史の方を土俵の外に押し出してしまったというのであるが、これは佐伯の単なる谷崎蟲貞によることではあるまい。

幸田露伴、岡本かの子、林芙美子、宇野浩二、坂口安吾、石川淳それに川端康成等そのいずれもが文学史の上では、史的な立場を与えられていない。

だが問題は、文学史からはみでているのは佐伯のいう「正統リアリズム」という本流に乗らなかつた谷崎や、反リアリズムの作家たちだけでなく、実は「正統リアリズム」の本流として扱われている作家たちの中にも、逆に本流として扱われることによって必ずしも正統な位置を与えられていると思えぬ作家が少なくないということである。

政治史——例えば南北朝の対立において、いずれが正統であるかというような史観は、今日一笑に付されるであろうが、いわんや文学史においていずれを本流とし、他を傍流とするという如き仮説を持ち込むことは同様に笑止の沙汰というほかはない。

傍流としての谷崎が不幸であれば、同様に本流としての島崎藤村もまた不幸であるといわねばならぬ。つまり文学史の「どこかが狂っている」としかいいようがないではないか。

しからば本流とか傍流とか仮説を設け、更に思潮別、運動別、グループ別などという枠組みを設けたのは、誰が誰のために行った案内記なのか。少くとも作家本人の多くは、あざかり知らぬところであろう。これなども月刊ジャーナリズムに帯同される文芸時評の功罪として批判されねばならないであろう。

だが、ジャーナリズムというのは、近代文学を近代文学たらしめるための最も時代的な風土である。先述した如く近世文学と近代文学との本質を大きく変化せしめた文学的基盤であって、単なる新聞・雑誌等報道機関の総称をいう

のではない。かつヤウスのいう「第三階級」の機能を最も敏感に反映することにおいて、これに如くものはないのである。

従つて、ジャーナリズムの歴史は、文学史の外側にあるのではなく、文学を生みだすための胎盤的機能を持つとともに、出生後はよきにつけ、悪しきにつけて、読者、観客に代わりその後見的な役割を果たしてきたものである。

このジャーナリズムと文学との密接不可分な関係を直視せざるかぎり近代文学の本質が論じられないのは当然である。してみると問題は、ジャーナリズムを文学の本質の上から毛嫌いすることではなく、ジャーナリズムの一つの機能である文芸時評と文学史との関係を根源から質して見る必要が生じてくるのである。

ジャーナリズムと文芸時評の馴合いと密通について、佐伯は谷崎を論じながら、

一九二〇年代後半から、つまり大正末、昭和初めから、この大作家（谷崎）は、わが国の近代文学史の枠の外にはみ出してしまった。こういう堂々たる大魚をあつさり閉め出して「プロレタリア、リアリズム」とか「新感覺派運動」とか「新心理主義」とか安っぽくけばけばしいばかりで実体のやせこけた雑魚ばかりを物々しく並べ立てて喜んでいた有様は、滑稽という以上に悲惨といわねばならぬ。その都度の新しがり、イズム好きの近視眼、そして又派閥と党派なしでは日も夜もあけない附和雷同性など、原因はいろいろあげることが出来ようが、つまりはあまりにも日本的な弱点の露呈というほかない。

とし、これは

わが国の文学界は、月刊ジャーナリズムが中心となっていることもあって、時流というか、時代の雰囲気には敏感すぎるほど敏感である。風にそよぐ葦といった具合に右にゆれ左にゆれて止まない。時代の「曲り角」とか